

—イザヤ52章・7-10、ヘブライ1章・1~6、ヨハネ1章・1-18

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。(中略)その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。—ヨハネ1章—

主の降誕(日中)

「まことの光」

福音書に救い主の到来を、その「誕生」について記録しているのはマタイとルカ福音記者で、彼らは『出来事』を述べていますが、ヨハネ福音書には出来事の意味が深く述べられています。

始めもなく終わりのもなく、神は永遠に存在し、その神の言葉で世界万物、そして人類は創造された。

造られたものの中で、人間は世界の管理を任せられ、「神の心」から放たれる「光」によって生かされ、命の完成(永遠の命)に向かう存在でしたが、神を離れて闇に落ち、命への道が閉ざされて、人生の意味を見失い、闇の中に消えて逝く『死』に怯える存在になっただけです。まるで、死刑の宣告を受けてこの世に生れ落ちてくるような、この不可解な人生に何の意味があるのかと怯える人生に!

ここに新聞の人生相談に投稿した一人の少女の悩みを紹

介します

『中2の夏ごろから、自分はいつか死んで、この世から消えてしまふんだということ意識するようになりました。それから、どんなに面白いことや嬉しいことがあっても、その考えが頭の片隅で邪魔をします。そんなことを考えてもしょうがない、今は生きているんだから今を精一杯楽しめばいいんだと何度も自分に言い聞かせるのですが、どうしても心からそう思うことができず、怖くて不安な気持ちから抜け出せません。人が歳をとって死ぬことは避けられないのだから、恐れるのではなく受け入れられるようになりたいのですが、それは難しいことでしょうか?』

主の到来の光はこの闇の中に輝くのです!

その光は人を欺いてお金をむさぼるオレオレ詐欺や、いかがわしい宗教が放つ光ではなく、すべての人を照らし、再び命の完成への道を示す「まことの光」、信じて受け入

れる人には信じた通りになる「信仰による光」です。この光を放つ場所は、意外にも宮殿ではなく、貧しい馬小屋の飼葉桶の中に眠る幼子からなのです。

飼葉桶の幼子とは、牛や馬がご飯を食べる茶碗!その中で「私を食べてください。私を食べ、私のように人のために命を捨てる愛で『平和の人』になってください」と言うメッセージです。

これが今日「まことの光」を求めてここに来られたあなたと、あの少女への、「永遠の命」の道への神からの愛のメッセージとなるでしょう。神が放つまことの光とは、到来してくださったイエスさまと出会い、神を心にいただくことなのです。

2022年12月25日

主任司祭 昌川信雄

